永久機関のジン（６-完）

別句通〈bekkutooru〉

（５から続く）
「答えはただ一つ。お前は自分の体内に永久機関エンジン仕込んでるのだろう」
「ばれたか。でも公式決闘(ファィト)には問題はないぜ」
「提案だ。私と組まないか。私の経験と十村教授譲りのお前の能力とで手を結べば、無尽蔵のエネルギーを創出し得る”完全なる永久機関”へ到達するのも夢じゃない！」
　ジンが険しい表情で、そう告げるコンゴウの顔を凝視した。
「ふ。承諾の顔には見えないな。いいだろう」
　コンゴウがかかえていないほうの手の人差し指でアイの顎をいじくる。
「かわいい彼女だな」
「んー！！」アイが体をじたばたさせた。
「セクハラオヤジ！いい加減アイを放しやがれ！」
「ここで公式決闘だ。宣言しろ」
「……」
　ジンは頬の上の眼輪筋を歪めつつ顎を固く締めて、レンズをはめた左腕を高く空に掲げた。
　コンゴウも続いて同じ仕草をした。
　地上５万ｍに軌道を描く人工衛星ハイビスカスが二人から発せられた電波をキャッチした。
　対戦者それぞれの足下が光を放ち、特許をかけて争う政府公認のデスマッチのゴングが鳴る。
「わはははは！」
　乙亥(キノトイ)の何本もの触手が不気味に蠢き尖頭が赤く輝き、レーザーがジンめがけて放たれた。
「ぐふっ」
　ジンは反撃のしようもなくよろめいた。
「ん、ん～っ」
　アイは目から涙の粒を落として顔をそむけた。
「今度は私の楽勝かな。負けを認めれば攻撃されずにすむのだぞ？ん？」
　ジンは睨み返した途端に装備を解いた。
　マクスウェルがばらばらと元の形に戻り床に落ちた。
「ちっ！公式決闘(ファィト)は装備どうしの戦いでなくては成立し得ないーそれを逆手にとったか。ならば否が応でも使わせるー」
　コンゴウは乙亥(キノトイ)の触手にアイを掴ませ、自らの手から放した。
　それを見てジンは喚いた。
「て、てめえ、何をするつもりだ！」
「見てろ」
　触手はアイを持ち上げ、ビルの外へ放り投げた。
「アイー！！」
「ほらほら、お姫様が落っこちてゆくぞ！ほっとけば下の地面の上で真っ赤な肉の塊の花が咲くぞ！」

　ジンはマクスウェルを猛烈な速さで再び装着し、コンゴウに向かって微笑んだ。
「ありがとよ。アイを放してくれて」
「何？」「周りをよく見やがれ！」
　屋上の周りに雲がむくむくとわき起こってくる。
「ここに登る前、ビルを暖房運転に切り替えて、夜間空調の氷が水になるのを待ったいた。その水分が今、雲に発達したのさ！」
　ジンの『マクスウェル』の一部がブーメランに変形し、めがけて飛ばした避雷針を切断した。
「永久機関の提要は、電子を意のままにし、電気の流れを操ることー！」
「くそぅ」
　コンゴウがすかさず乙亥(キノトイ)の内部に身を隠そうとした。
　しかしその寸前に雲から稲妻が走りコンゴウに落雷した。
　あたりは落雷の被害による煙が漂っていたがか、すぐに消え、風で吹き流されていった。
　消えゆく煙の中からジンが姿を現す。
　顔もすっぽり覆って装着したマクスウェルの頭頂部は長く棒状のように伸び、背中からはひも状のものが床面に垂れていた。
　マクスウェルの一部を避雷針に変えていたのだ。
　停止した乙亥(キノトイ)から落ちたコンゴウは気絶して倒れている。
「俺がアンタを倒しても別にメリットねえけどな」
　ジンは表情が変わり、周囲を見回す。
「おーいスピア！アイは大丈夫かー？」
　ジンはアイが飛ばされたビルの縁のほうへ走っていき、下をのぞき込んだ。
「お、ナイスキャッチ」
　果たしてスピアがその体を風呂敷のように広げてアイをキャッチして、ふわふわ浮かんでいた。
「んー、んー」
　ジンに顔を向けたアイは青い顔をして微動だにせずいる。
　スピアがアイを屋上に運び上げて、ジンがアイの緊縛を解いてやった。
「ありがとう」
　アイがスピアを撫で、頬を染めてジンに微笑んだ。
「よかったぜ。君に何かあったら死んだ親父にも顔向けできねえ」
　アイは目を細めてジンを見つめながら言う。
「こんな危険なのに、なんで永久機関に携わるの。やっぱりお父さんの遺志？」
「なんかわからないけど、親父の目指していたその先を見てみてえんだ」
　満月の周りの色は、夜空を埋め尽くしていた漆黒からゆるやかな群青に変わり、かなたの水平から朝日が昇り始めていた。その光がアイとジンの二人と傍らに浮かぶスピア一体を照らし始めていた。
　次の日、老若男女であふれかえる雑踏の繁華街にあるゲームセンターの中から、ジンとアイが

出て来た。
　それからスピアが二人の後をふわふわと追ってくる。
　アイは歩きながら、ジンと頬を寄せて写したプリクラシールを手帳の表紙に貼った。
「でさー、あたしのことずっと守ってくれるんでしょ、ジン君」
「ああ。まあね」
　ジンは得意満面でアイを見つめる。
「うちのおじいちゃんの研究施設使ってくれてもいいよ」
「じゃあベッドもご一緒していい？」
　ジンは鼻孔を思い切り広げて、目をつぶって口を尖らせ、アイの顔に近づけた。
　アイは厳しい顔つきになって貼り残しのプリクラシールをジンの唇に貼り付けた。
「むぐっ」
　もはや初夏から真夏に変わりつつある強い陽射しがトキヲのアスファルトやコンクリートを照りつけていた。それはいやでも大都会の熱気を加速させていた。（了）

永久機関のジン（６）

http://p.booklog.jp/book/76515

著者：別句通〈bekkutooru〉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile
*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。
*本作品の２次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkcircuit.comか
若しくはhttps://twitter.com/bekkutooru
にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/76515

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/76515

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ